

19 世紀フランス農民世界における噂のダイナミクス

工藤 光一

目次

序. 噂の歴史研究が追究するもの

1. 噂の発生条件
 2. 人心操作と噂
 3. 噂の伝播
 4. 噂への公権力の対応
- おわりに

序. 噂の歴史研究が追究するもの

噂は、さまざまな学問分野の研究対象となってきた。1998 年にドイツで刊行されたハンス＝ヨアヒム・ノイバウアーの『ファーマー—噂の歴史』¹は、歴史学、文学、社会学、文化人類学、図像学の交差する領域に「噂の文化史」を描こうと試み、噂が学際的な研究対象たり得ることをよく例証する研究となっている（ノイバウアー、2000）。

だが、噂を今日まで最も精力的に研究してきたのは、社会学と社会心理学であろう。社会学と社会心理学の知見が噂の歴史研究に益するところも少なくない。そこで、まずはこれら二つの学問領域の噂研究について簡単に触れておこう。

そもそも、噂を最初に科学的な研究の対象としたのは、20 世紀初頭の実験集団心理学であった。そこでは、情報内容が口頭の伝達過程でいかに変容するかを実験によって分析することが追究された。つまり、噂のコミュニケーションを歪みを含んだ伝達過程と捉えることから出発し、誤った情報が生み出される際の規則性に関心が傾注されたのである。この研究系譜の一つの到達点として噂研究の古典たる地位を獲得したのがアメリカのゴードン・W・オルポートとレオ・ポストマンが著した *The Psychology of Rumor* (1947) であった。同書で二人が rumor と称しているものを、邦訳者の南博は「デマ」と訳して

いる。それは、この著書たちが、まさに情報の伝達過程において歪みが発生することを問題とし、**rumor** は情報を歪めてしまう一種の「病理的な現象」であって、**rumor** という「病菌」に対する「免疫」を高めるよう工夫する必要を説く啓蒙の目的を持っていたからである。オルポートとポストマンは、**rumor** のもたらす歪みには、情報の細部が捨てられ骨格だけが残ってゆく「平均化」、情報の一部だけが誇張される「強調」、情報が先入観やあらかじめ抱いている関心と整合するように捻じ曲げられてしまう「同化」という 3 つの基本型があることを実験によって示した。また、「デマの流布量 (Rumor) は当事者に対する問題の重要性 (importance) と、その論題についての証拠のあいまいさ (ambiguity) との積に比例する」、すなわち $R \propto i \times a$ という基本公式が成り立つことを主張した（オルポート、ポストマン、2008）。二人のこうした見解は、その後多少の異論を差し挟まれながらも、基本的には受け入れられてゆくという状況が長らく続くことになる。

一方、以上のように情報の連続的伝達における歪曲の問題に注目した研究を「個人に重きを置きすぎる傾向 (individualistic bias)」を示しているとして批判したのが、日系アメリカ人の社会学者タモツ・シブタニであった。シブタニは、その著書 *Imvised News : A Sociological Study of Rumor* (1966) の中で、オルポートとポストマンに代表される研究系譜の説明図式においては、「流言 [rumor を邦訳者の広井脩らはこう訳している] を流布させる人々は、まるで少しも共通なところのない実体でありそれが独立した単位として行為するかのごとく扱われる」として、「どんな企てにおいても一緒に行為する人間は複雑な社会関係の網のなかに組み込まれているという事実」が無視されていると指摘した。かく言うシブタニにとって「流言」とは、「あいまいな状況とともに巻き込まれた人々が、自分たちの知識を寄せあつめ

¹ 「ファーマ Fama」とは、噂の女神のこと。

ることによって、その状況についての有意味な解釈を行なおうとするコミュニケーション」であり、著書のタイトルに掲げられているように、情報不足の人々によって「即興的につくられるニュース」なのであって、「集合的な問題解決の一形態」として捉えられるものである。したがって、「考察すべきは連続的な伝達における歪曲ではなく、適切に定義できない状況におかれた人々が行なう社会的相互作用」であると彼は主張した（シブタニ、1985、21、34頁）。

こうしたシブタニの考察は、rumor は「病理現象ではなく、新しい環境に対処する際に人々がいつそう適切な方法を発達させていく不可欠の要素なのである」という見解を導き出し（シブタニ、1985、260頁）、rumor とは人間の本源的な欲求に由来するものであることを示唆した。ともにアメリカの社会心理学者ラルフ・L・ロスノウと社会学者ギャリー・A・ファインが1976年に「社会的交換」という観点から噂のメカニズムを体系的に記述した仕事にせよ（ロスノウ、ファイン、1982）、フランスの社会学者ジャン＝ノエル・カプフェレが噂を「自己表出を交換する機会」と見る認識に立ちつつ多様な噂に広範に目を配った1987年の仕事にせよ（カプフェレ、1993）、シブタニの示唆した方向性を継承していると言える。最近でもアメリカの社会心理学者ニコラス・ディフオンツォは、次のように、噂が人間の本源的な欲求に由来するものであることを明言している。「この地球上に生きる私たちの旅は、多かれ少なかれ不確実なものだ。人間に見えるのはせいぜい一部であって全体ではない。噂は世界を共同で理解する手段であり、一部しか見られない人間の限界に集団で立ち向かう方法だ。人間が不確実性とともに生きる限り、噂は人生のあらゆる活動とともにある。それは社会生活を営み、世界を集団で理解しようとする人間の特徴を反映している。したがって、噂を信じたり広めたりする行為は、人間であることの中心を成す、基本的で重要な部分を映し出しているのに他ならない」（ディフオンツォ、2011、34-35頁）。

日本における噂の社会学的および社会心理学的研究に眼を向ければ、まず1937年に清水幾太郎が『流言蜚語』を著している。この著書は、当時進行中であった欧米の実験集団心理学による噂研究とは

まったく関係を持っておらず、完全に清水個人の独創的な思考の産物である。事例分析によることなく、徹頭徹尾理論的考察のみで「流言蜚語」の本質に迫ろうとしており、「アブノーマルな報道形態」であり、検閲下の「潜在的輿論」である「流言蜚語」の性格を透徹した論理で浮き彫りにしている。時局への抗議を秘めつつ、「流言蜚語」のうちに覗いている欲求や願望を捉えようとした本書は、清水の熱い想いのこもった雄編であった（清水、2011）。清水は、「流言蜚語」が「政治と社会に対する一種の抗議を含んでいる」（清水、2011、12頁。戦後の1946年に新たに付された「序」での言）という点を重視して、この先駆的力作を書いたが、こうした視点は、戦後になって、「流言蜚語」に民衆の抵抗意識や抗議の姿勢を読み取る南博（1962）や藤竹暁（1974）の仕事へと継承されたと見ることができる。だが、「流言蜚語」に民衆の抵抗意識や抗議の姿勢を読み取る潮流が、戦後日本の社会学的ないし社会心理学的な噂研究において本流を形成したとは言い難い。戦後日本における社会学ないし社会心理学の分野においてとくに力が注がれてきたのは、広井脩（広井、1988；2001）に代表されるような「災害流言」の研究であった（早川、2002、14-15頁の指摘を参照）。その他では、社会史の問題構制に呼応しつつ民俗学の知見も援用して噂の歴史社会学を展開している佐藤健二の仕事（佐藤、1995）や「流言」をジンメル形式社会学の観点から理論的に考察した早川洋行の研究（早川、2002）が眼を引く。

筆者は社会学と社会心理学の噂研究を系統的・網羅的に読んできたわけでは決してないが、以上にあげた社会学と社会心理学の噂研究では、噂を研究するに当たり筆者には本質的とも思われるある問題がほとんど扱われていないことに気づく。それは、噂と想像力との関係という問題である²。実はこの問題は、歴史学ではしばしば論じられ、噂の歴史研究において重要な位置づけを与えられてきたのだ。

日本ではあまり知られていないことだと思うが、

² モラン（1980）は例外と言えよう。社会学者エドガール・モランは、噂を「神話」と捉え、「神話は、心理＝感情の論理にしたがって体系化され、一貫性をもった想像上の物語なのである」（モラン、1980、61頁）と主張している。

マルク・ブロックは、1921年に『歴史総合雑誌』に「戦時の虚報についてのある歴史家の省察」と題する論文を発表している。これは、第1次世界大戦期の「虚報」を研究対象とした論文だが、その中でブロックは大戦下の「虚報」を「集合的想像力 *imagination collective* のこの特異な隆盛」と表現し (Bloch, 2007, p. 20)、さらに想像力と「虚報」とのダイナミックな関係についてこう論じている。「虚報は、その誕生より前に存在する集合表象から常に生れる。虚報が偶発的なのはうわべでしかない。あるいはより正確に言えば、虚報における偶発的なものとは、必ずやありふれたものであるきっかけとなる出来事がすべてであって、この出来事が想像力の働きを引き起こすのである。しかし、この揺り動かしが起こるのは、想像力がすでに準備され、ひそかに発酵しているからに他ならない。ある事件、たとえば何らかの間違った認識がすでにあらゆる者の精神が傾いている方向へと向わないのであれば、それはせいぜいのところ個人の錯誤の起源をなすに留まり、広汎に流布する民衆的な虚報の起源とはなり得ないだろう」 (Bloch, 2007, p. 45) ³。

「虚報」を考察するうえでブロックが用いた「集合的想像力」という言葉は、ジャン・ドリュモアが14世紀から18世紀の西洋における恐怖心の歴史を通観した中で噂について論じた際にも用いられている。ドリュモアは、「集合的想像力はあらゆる種類の噂に働きかけていた」と捉えて、不安や恐れに根差す集合的想像力が噂にどのように働きかけたかを描き出してみせた (ドリュモア、1997、323-338頁)。

さらに最近では、近代における噂の歴史研究に、主に中世史において用いられてきた「イマジネール *imaginaire*」という概念（「想像力の世界、想像力の産物」を表す。本稿では「想像界」と訳す）が導入され⁴、噂と想像界との関係が問われるようになった。

1841年に実施された全国的な税務調査に対して主に南フランスの各地に広まった騒擾を研究したジャン＝クロード・キャロンは、騒擾を誘発した新税の噂に注目してこう論じた。「噂は、想像界に対応するものである。この想像界は、現実界に根を下ろした恐怖（経済状況がどうであれ徴収される租税）を糧にすると同時に、慣習行為とその対象との間の空想的な歪み（租税は「金持ち *gros*」や「太鼓腹 *ventrus*」のポケットに入る）によっても育まれる」 (Caron, 2002, pp. 77-78)。また、19世紀フランスの噂を包括的に研究したフランソワ・ブルーは、研究の軸心をまさに噂と想像界の密接な関係を解明することに置き、次のような明快な主張を提示した。「噂は、徴候であるとともに動因でもある。というのも、ある社会ないし集団の想像界の産物である噂は、拡散してゆくにつれて、この想像界を維持し、助長し、加工するのに寄与するからである。噂は、世界観や信念や表象を露わにするが、転じて行動や態度を引き起こしもある。…したがって、ある一つの噂ないし一連の噂を見つけ出し解読することは、次の二つのことを同時に可能にするのである。一つは、噂がその内部で広まる社会集団の想像界の諸特徴を抽出することである。もう一つは、神話、信念、社会的想像界の生産と再生産において働いているメカニズムのいくつかを明らかにすることである」 (Ploux, 2003, p.12)。

そもそも人が他者に対して、根拠がなく、検証不能で、さらには客観的事実によって否定される情報を言明するということは、他者とのコミュニケーションに想像界が介入するからだと筆者も考える。だから、噂の追究は、想像界の働きの理解に資する。そして、想像界の働きを理解すれば、人間は、自己を取り巻く世界をありのままに捉えているのではなく、それに一定の意味を付与しているものであり、そうやって認知的に再構成した世界像に基づいて行動していることが明瞭に見えてくるはずだ。この再構成された世界像に準拠して人間は行動するのであるならば、その行動はたとえどんなに情動的であろうとも何らかの論理性を持つと言ってよい。したがって、噂の追究は、想像界の解明を介して、人々の行動様式の論理についての理解を深めるのに寄与する

³ ブロックのこうした考察は、その11年後の1932年に刊行されたジョルジュ・ルフェーヴルの『1789年の大恐怖』を想起させる。この著書でルフェーヴルは「大恐怖」を「巨大な「虚報」」と表現している (Lefebvre, 1988, p.96)。この「巨大な「虚報」」にルフェーヴルが看取した心理的メカニズムは、あたかもブロックによって第1次世界大戦期の「虚報」のうちにすでに見出されていたかのような感がある。

⁴ 中世史の泰斗ジャック・ルゴフの「イマジネール」概念については、甲山 (1999)、甲山 (2002) を参照。

ことができる。とくに民衆の行動様式の論理を探ろうとすると、そのための資料として民衆の行動の証言記録や裁判記録が重視されてきたが、噂の言説もまた無視し得ない資料体となり得る。この点については、アラン・コルバンが、1870年にペリゴール地方のある村での定期市に集まった農民群衆が地元の1人の貴族を虐殺した事件を探求した著書の中で、次のような指摘をしている。「噂の位置するところを突きとめることは、民衆の行動様式の論理を見抜こうとする者にとっては不可欠の作業となる。噂は、それを伝える人々を分割するような種々の社会的緊張を物語るものである。他のいかなる情報伝達様式にもまして、それは人々の欲望や不安をあらわにする」(コルバン、1997、21頁)。もっとも、噂は民衆にのみ現出するものではない。それは、シブタニの言う「公衆」のうちに流布する。シブタニの定義では、「公衆」とは「ある出来事が生み出す結果に自分たちが巻き込まれるだろうと考え、それをコントロールする可能性に関心をもっている人々のこと」(シブタニ、1985、60頁)である⁵。われわれは、こうした意味での「公衆」の想像界を探る手がかりを噂に求めることができる。

コルバンが上記の著書の中で次のようにも述べていることは、筆者にはさらに重要だと思われる。「本当の意味で想像界の社会的研究を進めるのに同意するのでない限り、この時代の政治史研究は実質的に進展し得ないだろう。だから、諸々の社会的あるいは領域的集団にその外部で作り上げられた表象システムを押しつけるような硬直したレッテル貼りはやめねばならない」(コルバン、1997、214頁、注142)。すなわちコルバンは、それぞれの「社会的あるいは領域的集団」は固有の表象システムを持つのであり、その固有性を捉えてゆかない限り、政治史の実質的な進展は望み得ないと言うのだ。各集団に固有の表象システムを明らかにするうえで「想像界の社会的研究」が必要なのであり、噂はこの「想

像界の社会的研究」に格好の素材を提供する。つまり、噂は、政治文化史にとっても重要な研究対象となり得る。筆者が噂に注目する最大の理由は、ここにこそある。

ここまで噂を定義せずに論を進めてきたが、ここで筆者なりの噂の定義を示しておきたい。だが、噂の厳密な定義は案外に厄介である。社会学や社会心理学でも、噂の定義は研究者ごとに異なると言っているほど多様だ。とくに日本語では、噂の類義語として「流言」があり、噂と流言を区別する論者もいる。だが、そうした区別も不適切であったり、あいまいであったりして、受け入れ難い。本稿では、あえて噂と流言を区別せず、同義語として扱う。そのうえで、噂には、社会的存在としての個人や集団の想像界から生み出され、他方その想像界を維持・助長・加工する、真実であることを証明されずに人々の間に流布してゆく情報という定義をひとまず与えておこう。

筆者の関心が農村世界にあるので、筆者は、19世紀フランスの主に農村世界における噂の内容と流布状況を明らかにしたいと思っている。研究史を振り返ると、19世紀フランスの噂研究は、フランス近世史やフランス革命史に比べて大きく遅れをとった。フランス近世史の分野では、すでに1970年代にイヴ＝マリー・ベルセが17世紀における激烈な反税一揆における動員ファクターとして噂を分析した(Bercé, 1973)。ジャン・ドリュモアが「恐怖心の歴史」を考察した著書(1978年)においても噂について論じられたことは、すでに述べたとおりである(ドリュモア、1997)。スティーヴン・L・カプランは、18世紀に広く流布した「飢餓陰謀」の噂を考察した(Kaplan, 1982)。アルレット・ファルジュとジャック・ルヴェルは、1750年にパリで生じた一連の民衆暴動における「群衆の論理」を探った著書(1988年)で、当時パリに流布していた子ども誘拐の噂に着目した(ファルジュ、ルヴェル、1996)。ファルジュはまた、「民衆的世論 opinion public populaire」の存在を18世紀パリに流布した噂のうちに見て取った(Farge, 1992)。さらにファルジュは、『ヨーロッパ啓蒙思想事典』で「噂」の項目の執筆を担当した(Farge, 1997)。フランス革命史の分野では、ジョルジュ・ルフェー

⁵ シブタニによれば、「公衆」とは、ある時期に注目の対象を共有しているということによってのみこれを確定できる一時的な集団ということになる。この集団は個々人の単なる不定形な寄せ集めではなく、なんらかの構造をもち、さらにその内部構造が状況が変わるにつれて変容してゆく。以上の点については、シブタニ、1985、61頁を参照。

ヴルの『1789年の大恐怖』(1932)が、噂の歴史研究の古典として屹立している。プロニスラフ・バチコは、「革命的噂 *rumeur révolutionnaire*」の歴史の一環を成したものとして、テルミドール期に流布した、ロベスピエールがルイ 16 世のあとを継いで国王になりましたがっていたという噂を扱った (Baczko, 1989)。

このように、近世史・革命史では噂の研究が早くから豊かに積み重ねられてきたが、19 世紀の噂に関する著書はいずれも近年に刊行されたものばかりである。このうち 20 世紀の末までに刊行され、噂を民衆の政治的態度との関係において分析した著書はわずかに 2 冊を数えるのみだ⁶。その一つは、「民衆的ボナパルティズム」を考察したベルナール・メナジェの著書で、メナジェは「民衆的ボナパルティズム」の表現形態の一つとして、噂を取り上げた (Ménager, 1988)。もう一つは、すでにあげたアラン・コルバン⁷の著書で、1870 年に起こった農民群衆による虐殺事件を検討するうえで、農民の感情の系譜を明らかにするために噂に関心が向けられた。同書でコルバンは、19 世紀フランス民衆の社会的想像界を探る上で重要となる噂について体系だった研究がまったくないことを嘆いている (コルバン、1997、21-22 頁)。

だが、21 世紀に入って、先述したジャン＝クロード・キャロンとフランソワ・ブルーの著書が刊行された。とくにブルーの著書は、今日までのところ、19 世紀フランスの噂についての最も体系的な研究と言え⁷、大いに参考になる。

噂を通じて、農村住民の想像界の諸特徴を捉えるためには、噂という情報形態のテーマ分析が必要である。筆者は噂の実証的なテーマ分析を予定しているが⁸、そこに踏み込む前段階として、まずは、噂はいかなる条件の下で発生するのか、噂はどのように伝播するのか、噂に対して公権力はどのように対応するのかといった諸問題を、19 世紀フランスの具体的な事例に即しつつある程度明らかにしておきたい。本稿

の課題は、19 世紀フランスの主に農村世界を対象として、こうした噂のダイナミクス (力学) を概観することである。

1. 噂の発生条件

フランソワ・ブルーは、19 世紀フランスの噂は、超自然的な領域に属するものはごくわずかで、「確かに真実ではないが、しばしば本当であつてもおかしくはなく、とりわけ政治と社会階級間の諸関係の領域に限定された情報を広めた」と指摘する (Ploux, 2000, p. 397)。だが、ブルーが 19 世紀フランスの噂にみて取ったこのきわめて傾斜的な配分は、彼が主に用いている資料の性格に因つてもたらされたところもあろう。彼が主として用いているのは、政治的・社会的秩序の攪乱要素になると見られる噂にとくに注目してこれを抑圧しようとした体制が生み出した資料 (たとえば、県知事から内務大臣への報告書、検事・検事長から司法大臣への報告書など) であり、それゆえ彼の蒐集した資料体は、「政治や社会階級間の諸関係の領域」に属するものが過剰代表される傾向を抱え込んでいると言えよう。とはいえ、19 世紀フランスにおける噂の全体的特徴を捉えることよりも、噂を政治文化史の研究に役立てようとの意図を持つ筆者にとって、ブルーの資料蒐集のあり方に不都合は感じない。

以上のような資料に基づいて、ブルーは、19 世紀 (正確には 1814-1870 年) のフランスにおける噂のクロノロジーを概観している。そこには、以下のような 8 つの大きな噂の波 (「噂の氾濫する危機 *crise rumorale*」) が見て取れるという (Ploux, 2003, pp. 75-76)。

(1) 最初の波は、1814 年 4 月のナポレオン 1 世の退位直後に始まり、1815 年 10 月以降急激に増大し、1816 年 1 月から 3 月に頂点に達し、1817 年春以降徐々に消えてゆく。

(2) 1819 年 3 月から 1820 年 6 月に、ユルトラ (超党派派) が立憲派の自由主義的政策 (とくに選挙法) に対抗して起こした攻勢によって動揺と不安が惹起され、噂が増殖する。

(3) 1823 年春、スペイン革命へのフランスの軍事介入によって、短期間だが爆発的な噂の増殖が引

⁶ この希少性は、19 世紀史研究が、民衆の政治的態度を決定する可能性のある要因として、集合的想像力や想像界をいかに過小評価してきたかを物語るものであろう。

⁷ ブルーは、この著書の予告編とも言える論文 (Ploux, 2000) も著している。

⁸ 本稿の「序」は、本稿のみの「序」ではなく、今後行う予定でいる研究も含めた、筆者の噂研究全体の「総序」とご理解いただきたい。

き起こされる。

(4) 1829年8月、貴族反動を体現するポリニャックが首相に指名されたことで引き起こされた政治的危機（これがのちに七月革命へとつながる）が噂の波を起こす。七月王政に入ると、1832年のコレラの流行が噂の蔓延をもたらす。

(5) 1841年8月から9月、全国の市町村で税務調査が実施されると、主に南フランスに新税の噂が広まり、南仏の広範な地域で騒擾が発生する。

(6) 1848年、急進共和派（「財産分割主義者 *partageux*」）に関する噂が、「持てる者たち」の不安を掻き立てる。これらの噂は、同年パリの六月蜂起後、農村部にパニックを引き起こす。

(7) 第二帝政の権威帝政期に噂が増殖する。少なくとも3つの要因の結合が、その増殖を説明できる。その3つの要因とは、クリミア戦争（1854年3月－1856年1月）、コレラの再出現（1854－1855年）、食糧危機（1854－1856年）である。

(8) 1870年、普仏戦争下に噂が増殖する。

以上のクロノロジーは、統計的な数量化によって導き出されたものではない。噂は、一つの村や一つの街区内でわずか数日で終息してしまうものもあれば、大きく地方全体を巻き込んで、数ヶ月、時には数年も続く場合がある。どちらも1件の噂と数えてよいだろうか。同じ噂のヴァリエーションと見なせるものは、すべてまとめて1件として扱うのか。結局、噂という対象は、数量化を行なうための明確な基準の設定ができないのであり、時間軸に沿って頻度の変化の振幅を厳密にたどることはおよそ不可能なのである。だから、噂の流布量の変動幅を見定めようとするいかなる試みも概観的にならざるを得ない（Ploux, 2003, p. 59）。ただ、ブルーが試みたように、噂が眼に見えて激しく増加する時期（ブルーの言う「噂の氾濫する危機」の時期）を資料から捉えることは不可能ではない。もっとも、ここにも留保が必要で、用いる資料（ブルーの場合、行政・司法・警察の報告書類）が噂の頻度の現実の変動を多少なりとも忠実に記録していることが条件となる。しかし、のちに見るように、19世紀の諸体制はいずれも、体制の秩序を揺るがしかねない噂を政治的敵対勢力の人心操作の産物と見なしており、第二帝政の権威帝

政期に典型的なように、体制の政治的な抑圧の度合が強いほど噂への警戒心も高くなり、噂が行政・司法当局者の報告書に記録される頻度が増す傾向にあった（Ploux, 2003, pp. 59-62）。行政・司法・警察の報告書類を資料とすると、このことは念頭においておかねばならない。

以上のような留保は必要だが、ブルーによるクロノロジーの試みは、当面われわれにとって一つの目安となり得る。ここから、19世紀フランスにおける噂の発生条件について、何が言えるだろうか。ブルー自身は次のように述べている。「噂は、希望や千年王国的期待の感情よりも不安や不確実さの感情の表現であることが多いから⁹、とりわけ混乱した時期に増加した」（Ploux, 2000, pp. 401-402）。「混乱した時期」とは具体的には、戦争、飢饉、伝染病の流行、政治的動揺などの時期である。ただし、噂が期待の感情よりも不安の感情の表現であることが多いのは、19世紀のフランスに限ったことではないようだ。社会心理学者のニコラス・ディフォンツォによれば、「人間にはポジティブな情報よりもネガティブな情報を重視する「ネガティビティ・バイアス」と呼ばれる性向がある。意思決定の専門家の調査によれば、人間はたいてい、自分の身に起こりそうな良いことよりも悪いことのほうに敏感なのだという。…したがって、「願望の噂」より「恐怖の噂」が多くてまわることになる」という（ディフォンツォ、2011、63頁）。つまり、噂は不安や不確実さの感情を掻き立てるあいまいな状況、もしくは脅威に直面しているか、将来の脅威が予想される状況でとりわけ生じやすいということになる。

こういう状況の中では、噂は脅威の性格を明確にし、しばしば脅威をもたらす張本人を特定する。たとえば、1832年のコレラ流行の際には、政府、ブルジョワ、あるいはそれらから金をもらった医者が給水所の水や小売店の食物に毒を仕込んでいるという噂が流布した（Ploux, 2003, pp. 65-68）。また、第二帝政期の食糧危機のときには、噂は、穀物高騰の原因

⁹ ブルーは、「希望や千年王国的期待の感情の表現」である噂の例として、王政復古下に流布した、ナポレオンの帰国を告げる噂をあげている（Ploux, 2000, p. 402, note 21）。

を、とくに貴族と聖職者が、王位継承権保持者シャンボール伯（「アンリ 5 世」）の権力掌握を図って皇帝と政府に対する民衆の不満を高めるために、民衆を飢えさせる陰謀を企んで、穀物を買占めたり、収穫物を廃棄したりしていることに求めた（Ploux, 2003, pp. 218-221）¹⁰。噂は、このように、人々が、とくに自己を不安に陥れる状況に巻き込まれたとき、その状況を何らかの一貫した解釈のもとに理解し、それに対処しようとすることで発生する。噂とは、シブタニが指摘するように、「人々が状況の定義を形成する過程」なのである（シブタニ、1985、22 頁）¹¹。

噂の発生には、偶発的な要因に関わることもある。この偶発的要因については、マルク・ブロックの「虚報」に関する考察をここで想起しておこう。ブロックは「虚報は、その誕生より前に存在する集合表象から常に生れる」と述べた上で、こう指摘していた。「虚報における偶発的なものとは、必ずやありふれたものであるきっかけとなる出来事がすべてであって、この出来事が想像力の働きを引き起こすのである。しかし、この揺り動かしが起こるのは、想像力がすでに準備され、ひそかに発酵しているからに他ならない」。この指摘は、噂における偶発的要因の働きを考えるうえで、重要だと思われる。

噂の偶発的要因としては、まず単なるふざけ話や冗談があげられる。第二帝政下では、皇帝の暗殺の企てを語る噂が絶えず繰り返されるという状況にあった。こうした状況においては、皇帝暗殺に関する冗談は、噂の源となり得た。1860 年、オーベルブリュック（オ＝ラン県）のある肉屋は、冗談でナポレオン 3 世が暗殺されたばかりだと語った。この暗殺は聖職者の仕業だという話がすぐに加わって、皇帝暗殺の知らせは 8 つの町村の人々を驚愕に陥れた

（Ploux, 2000, p. 399; Id., 2003, p. 83）。1854 年同じくオ＝ラン県のある農民は、聴衆を驚かして喜ぼうと、イギリスが東方問題をめぐってフランスと手を切り、ロシアの旗の下にアルザスへまさに進軍しようとしていると嘘をついた。この話は噂となって、アルトキルク郡に広まった。このふざけ話が噂へと変貌した理由は、まず心理的コンテキストがそれに好都合であったことがあげられる。当時、クリミア戦争、穀物の高騰、コレラの流行が重なって、人々の間に強い不安感が醸成されていた。さらに、すでにさまざまな噂（同県ではとくに正統王朝派の陰謀や皇帝暗殺の噂）が飛び交っていたという事情があり、これらの噂に動揺していた人々がさらなる情報を欲していたということもあげられるだろう。このようにすでに噂が交錯している状況がある場合も、ふざけ話や冗談は、噂に姿を変えることがあり得たのである（Ploux, 2003, p. 82）。

噂を引き起こすきっかけとなった偶発的出来事がごく些細なものでも、噂がきわめて大きく広まって、噂によって危険の切迫を信じた非常に多数の人々による防衛的な集合行動であるパニックが生じることがある。1789 年の「大恐怖」がまさにそうした現象であったが、1848 年のパリにおける六月蜂起の鎮王後にもこのようなパニックが、ノルマンディー地方、ラン＝サン＝カンタン＝カンブレを結ぶ北フランスの一部、シャンパーニュ＝アルデンヌ地方、フランス中西部の一部、同南西部の一部の 5 地帯に生じた。このときパニックに陥った諸地方の多くは、1848 年の二月革命直後に、「財産分割主義者 *partageux*」の支配を確立するための大きな陰謀の噂が名望家によって広められていたところである。これらの地方の農村部においては、パリでは労働者が次々と騒動を起こしており、やがて「財産分割主義者」が農民から土地や穀物を奪いに来るだろうと不安をもって語られていた。また、これらの地方の多くは小麦の搬出地で、1848 年における穀物価格の暴落は、穀物の低値の恩恵を受けているパリの労働者に対して敵意の感情を育んでいた。恐怖が頂点に達したのは、パリでの六月蜂起が鎮王された直後であった。公式声明は、「士気を失った蜂起民は農村部に逃げ込み、そこで国民衛兵に逮捕されている」と伝

¹⁰ スティーヴン・L・カプランが 18 世紀フランスの枠組で注目した「飢饉陰謀」の噂（Kaplan, 1982）は、異なる文脈においてはであるが、19 世紀フランスにも見られる。第二帝政期のそれは、「飢饉陰謀」の観念のフランスにおける最後の表現であった。

¹¹ シブタニのこの著書の訳者である広井脩らが同書に付した訳注によれば、「状況の定義 *definition of situation*」とは、社会学の中でもとりわけ象徴的相互作用論の鍵概念の一つであり、「外部世界に対して意味付与を行ない、状況がある程度一貫した解釈のもとに理解し位置づける活動、およびその結果得られた状況認識の枠組」のことを言う（シブタニ、1985、340 頁、訳注(2)）。これは、表象の歴史学とも一脈相通じる考え方であると筆者には思われる。

えたが、地方では、パリから逃げ出した叛徒たちが盗賊行為に走っているとの噂が広まった (Ploux, 2003, pp. 83-88; Lefebvre, 1988, p. 76)。こうした状況においてパニックは発生したが、大抵の場合、各地でそのきっかけとなった出来事は実に些細なものであった。ノルマンディー地方のパニックを例に取ろう。1848年7月4日、ヴィール（カルヴァドス県）の集落に近いところで、農作業に出かけた一人の老女が、路傍に不審な様子の2人の男を見かけた。一人は疲れて不安げな様子で腹ばいになり、もう一人はひきつった顔で行ったり来たりを繰り返していた。後の調査で、この2人連れは精神障碍の息子とその父親であることが分かったが、老女は2人を盗賊だと思い込み怯えた。そこに地元の若者が馬に乗って通りかかり、老女は彼に自分の恐怖を伝えた。若者は急ぎ馬をヴィールへと走らせ、盗賊が迫っていると村に伝えた。すると、「財産分割主義者」の盗賊団が迫っているという噂がたちまち他の村や町に流布していった。噂が広がってゆくうちに、伝えられる盗賊の数は増えてゆき、最初は2人だったのが、10人、300人、600人となり、サン＝ロ、バイユー、カンの諸都市に至ると、3,000人の盗賊がヴィール近隣の森に集結し、略奪、火付け、殺害を犯していると噂された。村々では早鐘が鳴らされ、住民たちが武装した。カンには、周辺農村から3万人以上の人々が武器を持って駆けつけた (Lefebvre, 1988, pp. 76-77; ソブール、1956、112-114頁; McPhee, 1992, p. 103)。発端となった出来事の些細さとその反響の規模の大きさと隔たりは、まことに印象的である。他の地方でも、同時期に、子どもたちを怖がらせようとした冗談、旅籠での口論、森の縁で密売人を見かけたことなど、やはり些細なことがパニックを引き起こしている (コルバン、1997、45頁; Ploux, 2003, pp. 87-88)。

19世紀フランスの農民は、アンシアン・レژیーム復活の切迫を告げていると信じられる徴候に細心の注意を払っていた。アンシアン・レژیームの復活を恐れる潜在的不安感が、ごく些細な偶発的出来事をその徴候として解釈する噂を生じさせることがあった。1820年、王位継承予定者ベリー公の暗殺が国中に動揺を引き起こしていた中で、フィジャック（ロ

ト県）周辺の農民たちは、古い城館のクロッキーを描いて廻っていた一人のイラストレーターの様子を窺い、ついには彼を激しく襲った。ロト県の県知事は、この事件について、内務大臣にこう報告している。「農民たちは、彼は旧領主たちの手先で、旧領主たちの代わりに、城館の復旧と譲渡された財産の回復のために、プランを立てたり策を練ったりしていたのだと信じていました」 (Ploux, 2000, p. 401; Id., 2003, p. 88)。また、1868年には、シャラント県、ドルドーニュ県、およびジロンド県の一部に教会十分の一税の復活の噂が広まり、農民たちが教会に押し寄せる騒動がこれらの諸県で相次いで発生した。その噂を引き起こしたのは、ごく些細な二つの出来事だった。一つは、正統王朝派の名望家レストランジュ侯がシュヴァンソー（シャラント・アンフェリール県）の教会にユリの紋地の上に諸聖人をあしらった2枚のステンドグラスを寄贈したことであり、もう一つは、ラ＝ロシュエル（シャラント・アンフェリール県）の新任司教トマが、マーガレットと麦穂が描かれた、自分の家紋の付いた盾形の標識を司教区の各教会に掲げさせたことであつた。農民たちは、ユリ紋に、またマーガレットと麦穂に、教会十分の一税復活が差し迫っている証拠を見て取った。教会十分の一税復活が差し迫っているとの噂が広まったシャラント県、ドルドーニュ県、ジロンド県の村々では、農民たちが棒や農業用フォークを手に教会になだれ込み、内陣を飾っていた花やブドウの房や麦束を奪った。農民たちにとって、これらの花や果物も十分の一税復活の急迫を告げる証しであつたのだ。時に司祭は手荒く扱われ、司祭を守ろうとした憲兵たちは石を投げつけられた (Bercé, 1974, pp. 214-221; コルバン、1997、36-38頁; Weber, 1976, pp. 250-251)。

19世紀のフランスでは、国家の実施する調査、統計作成が噂を引き起こすこともあった。このような噂には、ローカルな住民の国家に対する警戒心が反映されていた。1819年12月、選挙法改正を求めるユルトラの攻勢によって引き起こされた不安から、各地にアンシアン・レژیーム復活の噂が流れる中、シャラント県のプロテスタントたちは、自分たちが対象とされた全数調査を新たな聖バルテルミーの虐

殺の前兆と解釈した。同県のコニャック郡では、村々の村長が、村民のこうした怯えを郡長に報告しに行っている (Ploux, 2000, p. 400; Id., 2003, p. 91)。また、1841 年の夏に、主に南フランス (アキテーヌ地方、ラングドック地方、オーヴェルニュ地方、アルプス地方など) のおびたしい数の村や町で発生した反税騒擾もこの種の行動様式に入る。この騒擾はトゥールーズから始まり、地域によってはきわめて激しい様相を呈し、トゥールーズやクレルモン＝フェランでは、軍隊との衝突により、叛徒側に死者を出すに至った。これらの騒擾は、直接税の厳密な徴収のために全国の市町村で実施された税務調査に抵抗して生じたもので、その背景にはこの調査を新税導入のための施策だとする噂の流布があった。この噂と騒擾の広がり、規模の大きさをゆえに、これはとくに注目し値する出来事で、以下で少々立ち入って見てみよう。

問題の税務調査を主導したのは、財務大臣ジャン＝ジョルジュ・ユマンであった。彼がスールト内閣の財務大臣に就任した 1840 年 10 月当時、国家は、鉄道の敷設・運河網の開設計画、ティエールによるパリの要塞化などによって、1 億 3800 万フランの財政赤字を抱え込んでいた。この事態に臨んで、ユマンは、課税率の引き上げや新税によってではなく、個人動産税、戸口・窓税、営業税などの直接税に関する諸法を厳密に現状に適用にすることによる税収増を図ることにした。1841 年 2 月 25 日の財務相通達は、建築財産、戸口・窓、個人課税対象の個人、営業税納税義務者、賃貸収入の総合調査を、全国の市町村で実施することを各県知事へ伝えた。しかし、この通達で規定された調査方法は、右派の正統王朝派からも左派の共和派からも、コミューン (市町村自治体) の自治を侵害するものとして批判を受けた。というのも、従来、定率税ではなく配賦税¹²である不動産税、個人動産税、戸口・窓税の場合、個人の課税額の査定は、市町村議会によって指名された配賦人の役目であり、税務署員はその配賦人の作

業に立ち会う権限しか持たなかったのに対して、今回の財務相通達は、調査実施の権限を国家役人である徴税監督官に与え、市町村長にはその支援を義務付けるという補佐的な役割しか認めなかったからである。当時、選挙法改正運動を展開していた共和派は、ここにさらなる政府批判の対象を見出し、正統王朝派以上に活発なプロパガンダ活動を繰り広げた。彼らは、新聞や張り紙や口頭宣伝で、徴税監督官の「家宅侵入」の違法性やユマン調査による租税負担の増加の脅威を唱え、人々のうちに古くからある反税感情に訴えかけた (Ponteil, 1937, pp. 316-324; Ploux, 1999, pp. 238-246; Caron, 2002, pp. 53-76)¹³。

以上のような財務大臣の決定とそれに対する反体制派の批判が引き起こした動揺が、噂の波を生じさせた。正統王朝派も共和派も政府による新税導入の脅威を宣伝したわけではなかったにもかかわらず、人々の間には、政府による調査は、彼らの所有する布製品、衣服、家財、寝具、食器、農具、家畜などの目録を作成することが目的で、この目録はこれらのささやかな彼らの財産にやがて新税を課するのに用いられるのだという噂が流布した。奉公人や、さらには生れてくる子ども、ないしは妊婦までもが新税の対象になるのだとも噂された (Ploux, 1999, p. 251)。テュル (コレーズ県) では、椅子に年間 1 フラン、衣装だんすに 10 フラン、シーツ 12 枚に 6 フラン、肌着 12 枚に 6 フラン、靴下 12 足に 4 フラン、毛布 1 枚に 3 フラン、女兒を産んだ女性には 20 フラン、男児なら 1 フランという具体的な課税額を示す噂が流れた (Ponteil, 1937, p. 335)。このように新税の課税額を詳細に伝える噂は、他の村や町にも確認されるが、こうした噂は、その信憑性を高めるのに寄与したことであろう。ここに見られる布製品や新生児への新税の噂は、決して新しいものではなく、アンシアン・レジーム期の南フランス各地に前例がある (ドリュモア、1997、327 頁; Bercé, 1974, pp. 72-75)。布製品や新生児への新税というこの強迫観念は、民衆心性のうちに深く根を張っていて、刺激

¹² 配賦税とは、徴税総額が立法議会によって定められ、立法議会は各県に割当額を配賦し、次いで県議会が郡に、郡議会が市町村に、最後に市町村議会が納税者に配賦する租税である (Caron, 2002, p. 63)。

¹³ 1841 年夏に広まった騒擾では、しばしば「共和政万歳」が叫ばれ、「ラ・マルセイユーズ」などのフランス革命期の歌が歌われた (Caron, 2002, pp. 141-165; Ploux, 2003, p. 102)。この時期の共和政支持の意識が、反税感情と密接に結び付いていたことが窺われる。

を受ければすぐに再出現するものであったと考えられよう。

騒擾は、大抵の場合、徴税監督官ら税務署の調査員がコミューンにやって来たときに起こった。しばしば、まず子どもたちが、調査を遂行する税務署員らを罵りながら、家から家へと彼らの後について回り、間もなく女たちが子どもたちに加わる。やがて男たちが介入すると、調査員たちに石を投げつけるなどの物理的暴力が始まる。そうすると、女たちはエプロンに石を集めて男たちに渡すなどの補助的な役割に回った(Ploux, 1999, pp. 257-258; Id., 2003, p. 99)。多くの村や町で、調査員たちは、「盗賊」「盗人」「悪党」と罵られている。騒擾は、布製品や家財への新税の噂にも窺えるように、家庭という私的圏域を国家の行政当局が侵害することへの抵抗の表現であったが、同時にローカルな共同体の基本的諸権利に対する国家の侵害への抵抗の表現でもあった。そのことを窺わせる 2 例をあげよう。ヴィルフランシュの憲兵隊中尉から陸軍大臣への報告書によると、ヴィルヌーヴェル(オート＝ガロンヌ県)では、農民たちは、調査にやって来た徴税監督官らに「大声で、しかし大いに落ち着いた様子で、政府は法によって規定された調査を行う権利を村当局から巻き上げるという大きな誤りを犯しており、税務署員が調査を行うに至るとしたら、それは無理やりのことでしかない」と明言しました」という。モンサンブロン(ロト＝エ＝ガロンヌ県)では、集合した群衆は、数名の委員を指名し、この委員たちに徴税監督官の家宅訪問を監視させるという挙に出て、いわば実力行使でコミューンの権利を回復した(Ploux, 1999, p. 256; Id., 2003, p. 100)。1841 年の夏に主に南フランスに広まった騒擾には、コミューンの諸権利を守ろうとする住民の熱意とその住民の国家に対する極度の警戒心が読み取れる。そして、この国家に対する強い警戒心が、噂の流布を促したのであった¹⁴。

2. 人心操作と噂

噂は、人心を操作するために意図的に流されることがある。プロニスラフ・パチコによれば、テルミドール期に流布した、ロベスピエールが国王となつてルイ 16 世の娘と結婚したがつっていたという噂は、ロベスピエールの排除を後から正当化するために、テルミドール 9 日のクーデタを起こした者たちによって捏造され、流された作り話であった(Baczko, 1989, pp. 15-56)。また、アラン・コルバンによれば、19 世紀のペリゴール地方の農村社会には、「農村ブルジョワジー」(非貴族の富裕な土地所有者およびそれを苗床とした自由業従事者など)による農民大衆の想像界への長く巧妙な働きかけという「ブルジョワの戦略」の強力な作用が見て取れる。この地方の「農村ブルジョワジー」は、フランス革命期に形成された反貴族の言説を増幅させつつ農民大衆へと広め、農村における社会対立の軸を富と土地所有から逸らせ、家柄や「カースト」を軸とした対立へと水路づけることに腐心した。「農村ブルジョワジー」の言説では、貴族の尊大さや傲慢さが大きくデフォルメされ、社会的格差を維持することに汲々とした貴族というステレオタイプが構築されてゆく。さらに彼らは、封建地代や領主裁判権が復活するかもしれないとか、国有財産の返却のおそれがあると騒ぎ立て、封建的諸特権の復活に対する農民の不安を煽り立てた。こうした噂を広めることで、「農村ブルジョワジー」は、アンシアン・レジームの復活をもくろむ「貴族の陰謀」という観念を農民大衆に刷り込むことに躍起になった。その結果、この観念は 19 世紀末頃まで農民大衆に取り憑き続けることになるという。また「農村ブルジョワジー」は、聖職者も貴族と結託してアンシアン・レジーム復活を企んでいると吹聴した。司祭の口やかましい厳格主義や、コミューンの問題に対する司祭の干渉や、高すぎる冠婚葬祭の料金が、司祭と農村住民との間に緊張関係をもたらしたことは、他の諸地方についてもよく知られているところだが、こうした緊張関係に基づいて農民のうちに醸成された「内生的な」反教権主義は、貴族と聖職者の結びつきの強さを故意に誇張して両

¹⁴ ユマン調査は、反税闘争の伝統を持ち、反税感情の強かった南フランスでは、多数の騒擾を引き起こしたが、北フランスでは、リールやドゥエといったいくつかの都市を除けば、調査は平穏に行なわれた。キャロンは、北仏でほとんど騒擾が発生しなかったのは、北仏が「国民空間 espace national」にすでに統合されていたからで、北仏では租税は有益な見返りをもたらすものとして民衆に受け入れられていたと見ている(Caron, 2002, pp.128-137)。七月王政期にもなお、国土の半分にも及ぶ地域に散在する多数のコミューンにおいて、国民国家への統合

を拒絶する意思が持続していたと言えようか。

者がアンシアン・レジームにおける卓越性や諸特権を復活させようとして陰謀を企んでいると言いつける「農村ブルジョワジー」の言説によって、さらに一層掻き立てられたのであった（コルバン、1997、13-30 頁）。

1819-1820 年の政治危機の場合にも、「農村ブルジョワジー」が噂を広めることで人心を操作しようとした好例を見て取ることができる。この事例について、やや詳しく見てゆくことにしよう（以下、この事例については、Ploux, 2000, pp. 408-410 および Id., 2003, pp. 173-177 を参照）。

そもそもこの政治危機は、選挙法の改正をめぐる生じたものであった。1817 年 2 月に可決された選挙法（いわゆる「レネ法」）は、純理派の思想から影響を受けた者たちによって、選挙における土地貴族の影響力を削減し、したがってまた、ユルトラの勢力を削ぐ手段として構想されたものであった。課税額年 300 フラン以上の有権者を県庁所在地に集めた単一の選挙会による直接投票という方式は、土地貴族よりも都市に住むブルジョワジーに有利と見なされていた¹⁵。実際、1817 年 10 月の選挙ではユルトラに替わって立憲王党派が多数を占めるに至った。下院議員の 5 分の 1 を毎年改選する規定も手伝って、左派を成した自由主義派の進出はいちじるしく、ボナパルト派や共和派までもが当選した。こうした事態に対して、ユルトラは、土地貴族により有利となるように選挙法を改正することを望んだ。そして、1819 年 2 月 20 日、バルテルミー侯によって貴族院に選挙法の改正が提案された。この提案に、議会も新聞も大揺れに揺れた。3 月 2 日、貴族院はバルテルミー提案を可決する。9 月 11 日の下院 5 分の 1 改選で、自由主義派は改選議員の 3 分の 2 の 25 名を当選させ、その中にはかつてのジャコバン派国民公会議員でルイ 16 世の「弑逆者」であるグレゴワールが含まれていたことは、ユルトラの恐れを正当化する

かのように思われた。政府の政策の右傾化を伴った、11 月 20 日の内閣改造の直後に、首相のドカーズは、選挙法改正案を下院の審議に付した。国王も玉座での演説でこの改正案に言及した。このような事態に対して、自由主義派は、レネ法維持を訴える請願運動を組織して、世論を動員することに乗り出した。彼らは、選挙法改正は憲章の保証するものの無効化へと、つまりはアンシアン・レジームの復活へと道を開くものだとして世論に訴えた。

だが、自由主義派によるこのプロパガンダ活動の現実の影響力を測るためには、出来事のクロノロジーに着目する必要がある。というのも、地域によっては、農村部の住民が、自由主義派がプロパガンダ活動に着手する前に、選挙法の改正がもたらし得る結果について、不安を示し始めた所もあるからだ。バス＝ピレネ県では、上院におけるバルテルミー侯の提案は、2 月 28 日に伝えられたが、この知らせは住民の不安を呼び起こした。イゼール、ドローム、モゼール、ウール、セヌ＝エ＝マルヌ、ロワール＝エ＝シェール諸県の県知事たちも、バルテルミー提案が県民のうちに引き起こした不安を報告している。ガール県とシャラント県では、もっとも不安を抱いたのは、プロテスタントたちであった。だが、こうした不安は、アンシアン・レジームの復活を恐れるものばかりではなかった。3 月の初めには、おそらくユルトラの反動の意思に対抗する保証と見なされていた国王に関して不安を掻き立てる噂も流れていた。コート＝ドール県では、国王は暗殺の犠牲となったと噂された。イゼール県では、国王は病気になったと言われた。アンドル県、バス＝ザルプ県、トゥーロン市では、国王が死んだという噂が流れた。また、3 月 5 日付けの憲兵隊のある報告は、バルテルミー提案がメーヌ＝エ＝ロワール県にきわめて激しい動揺を引き起こしたことを述べたうえで、次のように付け加えている。「もっとも憂慮すべき噂が農村部に流布しており、その中には、内戦が迫っているとの噂すらあります」。同じ時期、フランス西部の諸県では、土地貴族・聖職者の影響力の強いヴァンデ県が深刻な騒乱に陥っていると噂された。

したがって、自由主義派のプロパガンダは、必ずしも 1819 年 3 月にフランスを見舞った恐怖の波の源

¹⁵ 有権者を県庁所在地に集めて単一の選挙会を形成するという方式は、ローカルな貴族や司祭が影響力を及ぼしやすい小郡ないし郡単位というより規模の小さな選挙会を開かないことで、土地貴族や司祭の選挙における影響力を弱めることを意味するものであり、また投票において土地貴族に不便な移動を強いるものでもあった。それに対して、その多くが県庁所在地に居住するブルジョワジーの有権者は投票で移動する必要がないことになる（De Bertier de Sauvigny, 1955, p. 146）。

になったわけではなかった。逆に、彼らは、その波を直接に引き起こせなかった所では、ユルトラの攻勢を、教会十分の一税、封建的賦課租、諸特権、賦役の復活へと、そしてとくに国有財産売却の取り消しへと必ずやつながるはずの事態だと言い立てることで、この恐怖に糧を与え、これを誘導しようと努力することになる。国有財産問題がとくに強調されたことは、レネ法の改正案に対抗して、農村社会の上部階層を動員しようとする自由主義派の意思によって説明がつくだろう。というのも、結局のところ、出回っている請願書の下欄に署名ができるのは、農村社会の上部階層に属する者たちに限定されるからである。

自由主義派のプロパガンダ活動は、パリ周辺の諸県（ソナム、オワーズ、セーヌ＝エ＝マルヌ、ロワール＝エ＝シェール、ウール＝エ＝ロワール、ウール、アンドル＝エ＝ロワール）でとくに活発であった。1817年の選挙法の維持を要求する請願書は、読書クラブ、居酒屋、カフェ、小売店、仕事場、市場を巡った。家から家へと回されもした。この請願書に署名を求めて回ったのは、公証人、弁護士、役人、「土地所有者」らであったが、彼らは、少なくともいくつかの県で、できる限り多くの署名を集めるために、請願書の内容を変質させて伝えた。すなわち、数多くの農民が文字を読めないのを利用して、自由主義派の活動家たちは、この請願書はアンシアン・レジームの復活の企図への抗議を含んでいると農民たちに信じ込ませたのである。彼らは、ほとんど常に同じ手法に訴えた。一般に、市の立つ日に請願書は、市に集まった人々に提示された。そして翌日には、封建制の復活や国有財産売却の無効化の噂が広まった。自由主義派の活動家が噂の流布に責任がある明らかな事例は、モゼール県、ソナム県、シャラント＝アンフェリウール県、モルタン郡（マンシュ県）、オート＝ガロンヌ県に見出される。ヴェルノン（アンドル＝エ＝ロワール県）の村長は、何人かの「共謀者」とともに、国有財産、教会十分の一税、封建的賦課租に関する噂を広めることで、署名を集めようとしたとして、起訴され、有罪となった（これらの噂は、トゥール近隣の6つのコミューンで指摘された）。この村長の「共謀者」たちは、中小ブル

ジョワジーに属していた（公証人、村長、卸売商、税務署員、弁護士など）。彼らは日常的に情報の普及における媒介者の役割を果たしていた。そうした社会的立場のゆえに、人心の操作も、彼らにはさほど困難なことではなかった。こうして、封建制復活の噂は、選挙法改正をめぐる対立が頂点に達する1820年の春まで農村部に流布し続けるのである。

しかし、同じ時期に、また諸々の別の噂も流布していたことに注目せねばならない。たとえば、子どもの毒殺、徴兵適齢者の特別招集（オート＝ヴィエヌ県の農村部では、ルイ18世が「黒人」王に軍事的援助を与える約束をしたので、新兵はアメリカの「未開の地」に送られるのだと噂された）、プロテストタントの虐殺、ブルターニュの蜂起、イエズス会への教育の委譲、王弟アルトワ伯への国王ルイ18世の譲位、貴族・聖職者と提携したアルトワ伯によるクーデタの試みとパリのフォーブール・サン・タントワヌの労働者たちの介入によるその失敗、穀物の高騰、盗賊団の存在、自由主義的諸条項を盛り込んだ憲章にあまりに執着している県知事や役人の罷免などが噂された。これらの多様な噂の出現は、政治闘争に身を投じた農村エリートたちが、農民たちの不安の感情を完全に誘導する能力は持っていなかったということを物語る。噂による人心操作について考えるとき、この点は見逃してはならないポイントであろう。

噂の流布において、意図的な操作—より特定のには政治的な操作—の役割を過小評価してはなるまい。「民衆的諸階層の政治的想像界は、現在の集合的経験といわば自己維持的な社会的記憶だけをもつばら糧とする完全に自立的な審級ではない」のであり、そして「19世紀には、民衆的諸階層の政治的想像界は、かつてないほど党派の宣伝熱に働きかけられた」のである（Ploux, 2003, p. 108）。しかしながら、噂によるプロパガンダは、人心に常に影響を与えるというわけではない。プルーが指摘するように、「虚報は、受容的な土壌と出会うという条件下でのみ広がるのである」（Ploux, 2003, p. 108）し、シブタニの述べるように、「煽動者の技量がいくらすぐれていても、人々のなかで発展しつつある雰囲気を反映した話でなければ受け入れられない。特に強い興奮状況では、

すでに「ひろまっている」(in the air) 内容に合わせた表現をしないかぎり煽動がうまくいくことはない」(シブタニ、1985、276 頁) ののである。さらに、噂は、それをプロパガンダとして創り出した人びとの思惑からしばしば逸れて行く。なぜなら、メッセージの内容が、個々人の観点に応じて、歪曲されたり再解釈されたりして、伝播の過程で変質を被り得るからである。噂を受け取った主体が、それをどう他者へと伝達するかは、意図的操作の埒外にある。すなわち、噂は、公衆内部における自立的な情報伝達のプロセスを前提とせざるを得ない。結局のところ、噂は「完全に統御されるわけではない力学に応じて進む」(Ploux, 2003, p. 108) と言えるのである。

3. 噂の伝播

噂の伝播のプロセスを考察するに当たっては、噂の発生地(噂の源となった場)と中継地(噂がそこを通過した場)とは区別せねばならない。だが、すべての噂が、主要な一つの発生地から拡散したというわけではない。一つの同じ噂が、互いに離れた複数の地から、一見したところ何の脈絡も窺えぬままに、同時に発生する場合もあり得た。先述した、1841年に南仏の諸県に流布した新税の噂の場合がそうであった。この噂の流布においては、主要な一つの発生地が見て取れず、発生地として特定できるのはいくつかの町であるが、そこから周辺の諸小郡へと噂が広まっていくという様相を呈したのであった(Ploux, 2000, p. 411; Id, 2003, p. 109)。

同時代の噂の観察者たちの大多数は、多少とも同類の噂が同時に発生するという現象を、公権力への敵対者たちによる組織された行動の証しと解釈した。一方で、より数は少ないが、おそらくより洞察力のある観察者たちは、まったく逆のことを推論した。1820年6月にピュイ＝ド＝ドーム県でありとあらゆる「ばかげた流言 bruits absurdes」が流布していたとき、同県の知事は、それらに公権力への敵対者たちによる組織された「悪意」を見ることはなかった。「なぜなら、[そのように見れば] 悪意をあまりに広汎なものと想定しなければならなくなってしまうだろうからです。[これらの噂は] いわば不安の激しさと多様さから同時に生じているのです。こうした不

安が社会の底辺の諸階層にまで及んでいるときは、とくにそうなのです」と知事は内務大臣に書き送っている(Ploux, 2003, p. 109)。

だが、国土の広大な部分に広まった噂の大多数は、パリに源を発した。私人の手紙によって、あるいは徒歩や馬車で移動する旅行者によって、パリで発生した噂は、そこから放射状に地方に伝播していった。その一例を以下にあげよう(この事例については、Ploux, 2003, pp. 110-113 を参照)。

1826年11月から翌年の1月にかけて、シャルル10世殺害の試みについての虚報がパリで広まったあと、地方の広範な地域へと広がっていった。警察資料によると、この噂は、国王が参加した狩猟の集いの最中に、ある衛兵に起こった事故が発端となったようだ。1826年11月末、シャルル10世が暗殺を免れたとパリで噂されるようになり、とくに居酒屋で話の種となった。この噂が地方へと伝播し、巨大な虚報となっていったのだが、噂の筋立てはほぼどこでも主要な4つのモチーフから成り立っていた。まず、事件は狩りの最中に起きたということ。暗殺者(噂のヴァージョンによって、狩猟地番人、衛兵、憲兵の違いはあった)は、国王に向けてピストルを撃ったこと。国王は軽傷で済んだこと。そして、企てが失敗したのを見ると、暗殺者は自分の「頭を撃ちぬいた」(各地の資料に現れる言)ということである。このような噂が、首都から地方農村へと伝播していったルートの具体例をいくつかあげれば、次のようなものがある。1826年12月末、スダン(アルデンヌ県)の居酒屋で、パリからやってきた5人の出張営業代理人 *voyageurs de commerce* が、ある薬剤師に国王暗殺未遂の報を告げた。この薬剤師は、彼らの話をスダン駐屯部隊のある軍曹に伝えた。軍曹は、その噂を機甲部隊兵たちに語った。これらの兵士たちが噂を街へと広め、さらにスダンから周辺農村部へとそれが伝播していった。このタイプの伝播ルートはよく見られ、まず噂が兵舎内部に広がり、次いで部隊の駐屯する都市へ流出し、それから周辺農村部へと流布していくことは稀ではなかった。また、パリ近郊にあるアルフォール獣医学校のある学生は、パリに隣接するシャラントンという町のカフェで国王暗殺未遂事件の話聞いた。彼は、エール

＝シュル＝リスという村（パード＝カレ県）に住む兄（軍の獣医官）に事件を手紙で伝え、手紙を受け取った兄は、すぐに村の居酒屋でその手紙を読み上げた。さらにアンドル県ならびにクルーズ県の場合、パリに滞在したのち故郷へ帰ってきた出稼ぎ労働者たちが、両県にこの噂を伝えた。

パリ以外の大都市が大きく広まった噂の発生地となることもあった。1829年3月、シャルル10世が死去したという噂が発生したのは、パリではなくリヨンであった。この噂は、リヨンからローヌ川沿いやニームおよびマルセイユに至る街道を経て南仏方面に広まり、「周辺諸県の山間地域」（ドローム県知事（?）から内務大臣への手紙での言）にまで及んだ（Ploux, 2000, p. 412; Id., 2003, p. 114）。ブルーの言うように、「すべての噂が大都市で生まれるわけではないが、大都市は共鳴箱の役割を果たし得る」（Ploux, 2003, p. 114）のである。1862年の末にナポレオン3世暗殺未遂の噂の発生が資料上最初に確認できるのはスイスのバーゼル州で、次いでその噂は隣接するフランスのミュルーズ郡（オ＝ラン県）に浸透したが、それが他の広範な地域へと広まったのは、パリを通過したのちのことであった（Ploux, 2000, p. 412）。

噂の流布圏の様相に注目すれば、農村における噂の流布の場合は、噂の語り手と聞き手とが直接接触し、口頭で噂が伝えられるので、噂の流布圏に大きな空白域が生じることはない。だが、情報の伝達に口頭以外のコミュニケーション様式とくに書簡や電信一が介入する場合や、噂が長距離を駅馬車等で移動する旅行者によって伝えられるとき、噂の流布圏は、より分散的な様相を呈することになる。流布圏が分散的な場合、とくに農村への噂の伝播で注目しておきたいのは、手紙の果たした役割である。兵士やパリで学ぶ学生、パリで働く出稼ぎ労働者などは、親族に宛てた手紙の中で、都会の居酒屋、仕事場、街頭、兵舎での会話の最中に聞いた話に言及し、意図せずして噂を自分の故郷へと広めてしまう。農村世界では、特定の個人に宛てた私的な書簡であっても、それが情報の集団的普及のプロセスへ挿入されることがあり得たことに注意しなくてはならない。手紙が宛先に届くと、隣人たちがそこへ情報を

求めにやって来る。また、手紙が居酒屋や村の広場で読み上げられることも稀ではなかった（Ploux, 2003, pp. 115-116）。

ある噂の発生地の人口規模の大きさとその噂の流布圏の広さとの間には、明白な関係がある。パリで発生した噂は、国土のどこへでも伝播する可能性があった。しかし、主たる一つの発生地がなくても、互いに離れた複数の諸県で同一の噂が指摘されることもあった。ある噂を聞いた者は、自己に関わるなんらかの事態が生じ得るとその噂から想定されるときにのみ、議論し、その結果として判断を得るために、それを周囲の他者に伝える。つまり、ある噂が流布するかどうかは、伝達主体の噂との関わり合いの度合いによって規定される。新たなサン＝バルテルミーの虐殺の噂は、プロテスタントの多い地域に流布した。教会十分の一税や封建的諸特権の復活は、農村部で噂された。一方、戦争、王政復古期のナポレオンの帰国、第二帝政期のナポレオン3世の暗殺などの陰謀、新税についての噂は、こうした社会的あるいは空間的限定を伴わなかった（Ploux, 2000, pp. 412-413; Id., 2003, pp. 116-117）。

19世紀の観察者たちが断言したのとは反対に、噂は、最も貧困な諸階層のみにもつばら流布したわけではなかったし、また必ずしもそれらの諸階層に優先的に流布したのでもなかった。ときには、社会階梯の上から下へと噂が伝播することもあったことを押さえておく必要がある。一例をあげよう。1860年4月頃、タシェ・ド・ラ・パジュリー夫人は、ある伯爵夫人の家を訪問した際に、皇帝の命を狙ったテロの噂を語った。伯爵夫人に家庭教師として雇われていた青年は、パリで勉学中であった友人にその噂を語った。その友人が今度は、プレーヌ＝フジェル（イル＝エ＝ヴィレーヌ県）に住む父親への手紙の中で、噂に触れた。こうして4月10日、その噂は同村に広まったのである（Ploux, 2000, pp. 413-414; Id., 2003, p. 117）。

噂の伝達主体に注目すれば、あるカテゴリーの人々が、噂の伝播においてとくに重要な役割を果たしたことが窺える。それは、浮浪者、行商人、駅馬車の御者など、恒常的ないし反復的に移動をする人々である。彼らは、定住的・孤立的な住民にとっ

て、多少とも定期的に外の世界の情報をもたらしてくれる人々であった。

浮浪者は、旅を続ける間に耳にした情報を提供するのと引き換えに、施しを受けたり、納屋に一夜の宿を与えられたりした。彼らには、寛大な恵みを引き出すべく、聞き手が気に入るような話をする傾向があった。1854年4月には、ある浮浪者が、王党派と目した修道士たちに対して、ナポレオン3世が病気で、間もなくアンリ5世の治世が訪れると語った。同時期、また別の浮浪者は、共和主義者と評判の職人たちに対して、間もなく皇帝の命を狙ったテロが起きると告げた (Ploux, 2000, p. 414; Id., 2003, p. 118)。

行商人については、1815年12月15日付けの各県知事宛て通達の中で、内務大臣ヴォブランは、こう述べている。「自分の村の教会の鐘楼が見えなくなる所へは行ったことがない農民たちは、旅をする商人たちの話を神託のように聞く」 (Ploux, 2003, p. 118)。この言葉は、公権力が行商人の民心に対する影響力をいかに不安視していたかを窺わせる。公権力は、行商人たちを反体制的党派によって金で雇われた手先ではないかと疑っていた。実際、1815年のこの内務大臣通達には、次のように記されている。「フランスは、あらゆる方向へと国を貫いて歩む行商人たちで覆われている。彼らの旺盛な生業は、最も小さな部落をも経巡り、最も孤立した住居にまで及ぶ。悪意や徒党的精神が彼らを利用して虚偽や陰謀の手先とすることがあまりにも多い。…彼らが害を及ぼすことを食い止めるためには、彼らを監視しなければならないし、彼らを有益なものに変えるには、指導が必要だ」 (Ploux, 2003, p. 119)。王政復古初期のように世情不安定な時期には、政府は地域当局に対して、行商人の動向を監視するよう要請したのであった。しかし、行商人は、反体制派の手先として組織的に噂を流していたのではなく、単に客を引き寄せようとの目的で、センセーショナルで、しばしば虚偽の物語を語っていたというのが実情であろう。1823年4月、毛布とハンカチを扱っていたある商人は、ロゼール県のある村の広場に商品を並べて、自分は脱走兵であり、ボナパルトがスペインにいと語った。またナポレオン3世の治世当初に、ニエー

ヴル県のある村では、一人の女乞食が、皇妃のポートルートを商品として並べて、皇妃は離縁された、「なぜなら、彼女は金持ちと外国人の味方だから」であると述べた (Ploux, 2003, p. 119)。

駅馬車の御者は、定期的に旅館や居酒屋などを訪れ、しばしば噂を各地で最初に広めることになった。駅馬車の通過に伴い、その経路に沿ってまたたく間に噂が広まっていくことも稀ではなかった。1859年6月、イタリアとの戦争の最中、ペルピニャンとポール＝ヴァンドル（ともにピレネー＝ソリアンタル県）を結ぶ駅馬車の御者は、ペルピニャンの壁に張り出された公式のビラの内容を自分では知ることができなかったので、ビラを見るために集まっていた人々にその内容を尋ねた。彼らは、皇帝が負傷したと彼に告げた。御者はポール＝ヴァンドルへ向けて馬車を走らせ、宿駅ごとにその虚報を伝えていった (Ploux, 2000, p. 414; Id., 2003, pp. 119-120)。

噂の流布過程においては、人々が集まって会話が交わされ、情報が交換される場が噂の放射点となる。農村世界における噂の放射点として特筆すべき役割を果たしたのが、定期市である。定期市に集まった人々が交わす会話について、コルバンは次のような特徴を指摘する。「この一時的な社会は、言語交換の空間を拡大する。それは人々を、農村共同体の内部を支配しているいくぶんか重苦しい面識関係からそらしてくれるのだ。隣人関係の枠からはみだす種々の情報が、このとき相互に伝達され、論評される」 (コルバン、1997、101頁)。定期市にやってきた人々は、自己が所属する相互面識集団の外部の情報を得て、村へと帰りそれを広めるのである。定期市から村へと噂が伝播した一例を見てみよう (この事例については、Ploux, 1999, pp. 253-254; Id., 2003, pp. 121-122を参照)。カンブリ (ロト県) の鐘つき人にして村役場の守衛であるベルナル・カスタンニエは、1841年8月、ユマン調査に関する虚報を広めた罪で起訴された。彼は以下のような供述をしている。「この前の8月14日、フィジャックでの定期市の日、私はそこに行きました。多くの者が間もなく行われる調査について話をしているのを聞きました。すべての台所用品、すべての布製品、すべての家具の目録が作られ、やがてどの道具も課税されるのだと語ら

れていました。そのような話をしていた者たちを名指しすることは無理です。なぜなら、[もしそうするとしたら] 私が居酒屋や小売店で出会ったすべての者たちの名前を挙げなければならないでしょうから」。フィジャックの定期市の翌日は、カンブリの守護聖人の祭日であった。ミサのあと、村民たちは教会の前でカスタンエが語る情報に耳を傾けた。鐘つき人はこう供述している。「私は言いました。税務署員はおれたちの家具調度の目録を作り、今週コミュニケーションにやって来るに違いない、奴らはどの道具にも税をかけるだろう、おれたちはベッドにまで税を払わなきゃならなくなる」。

村の相互面識集団の内部で噂がどのような流布過程をたどったかについては、行政・警察・司法関係の資料からはほとんど窺い知ることができない。行政・警察・司法関係者は、噂を最初に広めた人物を特定するよう努めるが、その後どのようなルートで村内に噂が広まっていったかには関心を払っていないのである。ただ、人々が普段から集まって会話を交わすソシアビリテの場が、このようなローカルな圏域における噂の放射点となったことは間違いなからう。そうした場としては、居酒屋、小売の店、職人の仕事場、夜の集い、洗濯場などが考えられる (Ploux, 2003, p. 121 を参照)。噂は、こうした場で語られたのち、村内へと拡散していったであろう。噂が必ずやこうしたソシアビリテの場を介して村内に広まったとは限らないが、ソシアビリテの場は、日常的に相互面識集団内の主要な言語交換の場としての役割を果たしていたがゆえに、噂の流れを増幅させる機能を持ち得たと見てよい。

4. 噂への公権力の対応

噂に対する公権力の対応について見る前に、19世紀の公権力が噂をどう見ていたかについて述べておこう。ブルーによれば、1814-1870年におけるフランスのどの体制下においても、公権力の保持者や行政当局は、一貫して、噂を公権力に対する政治的敵対者による無知で軽信な人々の操作の産物としてみなしていたという。ナポレオンの百日天下では、王党派が虚報を流していると見られた。王政復古の初期には、帝政復活を望む者たちが国中を襲った噂の波の源と疑われた。しかし、同じ王政復古期でも、

王党派が9割以上の議席を占めた「またと見出しがたい議会」の解散(1816年)直後には、ユルトラの手先も虚報の流し手としてしばしば非難され、一方1819年以降は、農村部に流布している虚報を公権力は「自由主義派」の術策によるものと見た。七月王政下では、「急進派」(共和派)が虚報の主要な出所として告発され、ときには彼らが正統王朝派と結託して噂を流していると疑われた。第二帝政下では、共和派の策略によるものと見なされぬ噂は、ほとんどなかった (Ploux, 2003, pp. 78-79)。

すでに見たように、党派的目的による人心操作の産物として噂を見ることは、まったくの過誤というわけではない。しかし、その見方は、噂の実態の緻密な観察に基づくものとは言い難かった。《噂=党派的人心操作の産物》と見る思考の枠組みは、公権力が噂の増殖を規定ないし促進している原因や噂の意味について深く省察することを妨げることになった。このような思考枠組みが自明なものとしての規定力を持ったのは、それが19世紀の政治エリートによって共有されていた民衆の表象を反映していたからだとブルーは指摘する。その表象とは、次のようなものだ。民衆は、素朴ではあっても、ある種の明晰さを本性として備えている。その明晰さのゆえに、彼らは、自分たちを統治する者たちを自発的に敬う。それが彼らの利益となるからだ。だから、体制へのあらゆる異議申し立ての言説は、民衆の外部からもたらされるのであり、民心操作の産物以外のもではあり得ない。実際、貧しい階級は、軽信で、非常に影響を受けやすい。彼らはどんなに「ばかばかabsurde」噂でも受け入れ、機械的に再生産してしまう。この階級は、固有のオピニオンを形成することができず、外部からの影響を受けやすい「客体としての階級 *classe-objet*」なのだ。19世紀の政治エリートは、この階級が、想像界を生産する能力を備えていることなど、ましてや独自の政治意識を持っていることなど考えも及ばなかったのである (Ploux, 2003, p. 80)。

このような民衆の表象を抱懐する公権力の噂に対する態度は、ある種の矛盾を呈することになる。統治者は、公衆のうちに流布する虚報の「ばかばかしさ」や「支離滅裂さ」を絶えず述べ立てる。しか

し、噂は、正統なる権威を揺るがす企図の道具として見なされるがゆえに、公権力にとってとくに注目しなければならないものなのである。「ばかばかしい」として否定するものに特別な注意を払わなければならないという矛盾は、アルレット・ファルジュによれば、18世紀の噂に対する公権力の態度にすでに見られたものであった。「人々は考え語り、広め繰り返す。これらの意見は、権力によって否定される一方で、その権力はそれらに執拗に耳を傾け、そのことを自らの抑圧装置の中心に位置づける」(Farge, 1997, p. 959)。19世紀についても同様である。「虚報は、一貫して「ばかげた」と形容されるが、内務大臣や法務大臣へ定期的に送られる詳細な報告の対象となるほどに重大視されたのだ」(Ploux, 2003, p. 80)。

噂に対する公権力の対応は、「噂を広める者を抑圧する(処罰する)」「流布している噂を否定する」「人々に情報を提供する」の3つの施策に大別される。公権力はこの3つの施策を組み合わせることで噂に対応したが、噂がどのような状況のもとで増殖するかは経験によって知っているはずであろうに、公権力が噂の増殖現象に先回りして施策を講じる(たとえば、噂が増殖する前に情報を人々に伝える)ことは稀であった。つまり、公権力は、流布している噂にアポステリオリに対応することが一般的であった(Ploux, 2003, pp. 46-47)。以下では、そのような公権力の噂への対応を、王政復古初期について具体的にみてゆくことにしよう。

ルイ18世の登位直後には、フランスを噂の嵐が襲った。ナポレオンの帰国、ブルボン朝の失墜、アンシアン・レジームの復活、決して実現には至らなかった陰謀や蜂起の噂が国中を駆け巡った。この状況に対して、公権力が全国レベルで採った最初の施策は、完全に抑圧的なものだった。すなわち、「煽動的行為 *acte séditieux*」を取り締まるために1815年11月9日法が定められたのだが、虚報を人に告げることも「煽動的行為」と見なされ、同法の適用の対象とされたのである。この法の第8条では、「国有財産と呼ばれる財産の不可侵性を傷つける不安にせよ、教会十分の一税や封建的諸特権のいわゆる復活の流言にせよ、正統な権威の維持について市民を不安に陥れたり、市民の忠誠を揺るがす傾向のある報にせ

よ、これらを広めたり、信憑性のあるものとして流布させたりした者は誰であれ」最高5年の禁固と2万フランの罰金を科されると規定していた(Ploux, 2003, p. 48)。

翌1816年1月には、内務大臣ヴォブランが、警察的抑圧とは異なるやり方で噂への対抗を組織しようとする。1816年1月24日付けの内務相通達、そのために採るべき方法を各県知事に指示した。ヴォブランの見るところ、主要な困難は、最も辺鄙なコミューンの住民とコミュニケートすることにあった。彼は、「民衆の理解できる言葉で」書かれたテキストを配布することを提案しているが、民衆の大多数が文字を読めない以上、おそらく彼自身、こうした方法がきわめて限られたインパクトしか持ち得ないことを自覚していた。それゆえ、彼は、口頭のプロパガンダに訴えることも推奨している。つまり、郡長が自分の郡のコミューンを巡り、直接農民に語りかけるべきだと唱える。定期市の開催は、そのための格好の機会となるだろう。さらに各教区の司祭に虚報を否定するために自分の持つ影響力を行使することを司教から奨励してもらうよう、県当局は司教と協議すべきだとも勧告している。では、虚報に惑わされている人々にどんな言葉を述べるべきか。彼らに誤りを悟らせる最良の手段は、噂の予言的な言説が事実によって否定され虚偽であることが明らかになったことを説いて、彼ら自身の軽信さに彼らを向き合わせることであろう。ヴォブランはこう述べる。「とりわけ、悪意が告げた出来事を丹念にたどらねばならない。悪意は、犯罪的な大胆不敵さをもって、それらの出来事の起こる日や時を明示したが、そのような日や時は、やって来ることはなかったのだ。新たな流言の信憑性を失わせるには、より古い流言が明白に偽りであったという記憶ほど役に立つものはない」(Ploux, 2003, pp. 49-50)。

1816年を通じて、県知事たちは、ヴォブランの指示に促されて、噂の増殖を阻もうと努めることになる。とはいえ、県知事たちの決意の固さも巧妙さも、それぞれに異なっていた。さらに、住民に向けた公式の言説の内容も県毎にまったく違っており、県知事の中には司法的な制裁の脅威を振りかざす者もいれば、むしろ説得に訴える者もいた。大半の県知事

は、1815年11月9日法の条項を喚起したり、流布している噂を否定するために、コミュニケーションに公式のビラを掲示させるか、県の新聞に声明を掲載させること以上のことはしなかった。住民に誤りを悟らせる任務を配下の者たち（とくに市町村長）に託すべく、中央権力の勧告を彼らに伝えただけの県知事もあった。世俗の行政当局が、教区の司祭の協力を得た諸県も見られた（Ploux, 2003, pp. 50-51）。

全体として見れば、以上のような措置に留まった諸県がほとんどであったが、より踏み込んだ策を講じた県もあった。モルビアン県の県知事は、1816年の3月半ば以降、噂の数が明瞭に減少したと見て取り、この減少には、彼が配布させた小冊子が貢献したと見た。その小冊子は、6ヶ月間に相次いだ噂を日付順に並べ、どれ一つとして実現には至らなかったことを記したものであった。1816年2月に、イル＝エ＝ヴィレーヌ県の県知事は、虚報を数え上げ否定した公報『悪意ある者たちについての公報』を印刷させた。同じく2月にオ＝ラン県の県知事は、内務省の資金援助を得て、噂への解毒剤として役に立つと見なされた、フランス語とアルザス語の2言語併用新聞『良識の友』紙を無償で配布させた。ムーズ県の県知事は、県の新聞に公式声明を発表するのではなく、虚偽であることが明らかとなった予言的な噂の一覧を掲載させた。エ＝ヌ県の県知事は、流布している噂を否定する記事を掲載し、村長、司祭、土地所有者といった農村世界で影響力を持つ者たちに配布する農村向け新聞の刊行を申し出たある印刷業者に支援を与えた。この新聞は、1816年1月に創刊され、翌年まで刊行された（Ploux, 2003, pp. 51-52）。

虚報を否定したり、それを告げる者に法的制裁を加えたりするだけではなく、住民に情報を提供するという施策も採られた。1816年2月3日付けの内相宛て報告書によると、オート＝ガロンヌ県の県知事は、「フランスの真の状況についての明白で正確な情報を農村部に広め、幾人かの扇動者を逮捕させました」という。1816年5月に、ジロンド県の県知事は、グルノーブルで起こった蜂起が引き起こした動揺を鎮めようとして、市町村長に事件の詳細を含んだ通達を送った（Ploux, 2003, p. 52）。

以上のように、公権力は、体制に敵対する勢力

（「悪意」「悪意ある者たち」）による人心操作の産物と見なした噂の増殖を食い止めるためにさまざまな施策を講じた。しかし、流布している噂を鎮めるための施策が、かえって噂の増殖を促すこともあり得たことに注意しておく必要がある。1816年1月23日付けの内相宛て報告書にはこう記されている。「ボナパルトの帰国の流言が、ニオール〔ドゥ＝セーヴル県〕に配置の県知事に、その流言を語るすべての者を逮捕するよう命じた宣言を出させました。この流言には宣言が新たな信憑性を与えてしまっているようで、それはアングレームからトゥールに至る道筋全体に流布しています」。また、1816年3月3日付けの内相宛て報告書によると、パ＝ド＝カレ県では、封建制の復活と国有財産売却の破棄の噂は、「新聞がそれらの噂を否定し始めたときになってから飛び交うようになりました。民衆は、自分たちを安心させようとする試みがなされるというただそれだけのことで、不安を抱くのが当然だと思ったのでした。想像力がようやく落ち着いたのは、想像力に対して穏やかにしているともう言われなくなってからのことです」（Ploux, 2003, p. 47）。公権力がある噂を語ることを禁じ、否定するとき、その噂が公衆においてはより信憑性を増すことがあったのだ。体制の正統性が認められていない場合にこうした事態は生じやすい。公衆は、自分たちが正統と認めない公権力が発する否定の言説を欺瞞と見なす。公権力に欺かれまいとする心の傾きが、噂の伝達に拍車をかける。公権力による噂の統制は、噂のダイナミズムをむしろ強めることがあり得たのである。

さらに言えば、公権力が正確な情報を人々に提供すれば、噂を消し去ることができたとは到底考え難い。噂は、単なる情報では代替しきれない、独自の機能を持つ情報形態だからである。この点について、ブルーはこう述べる。「集合的想像力の産物である噂が、人々によって耳を傾けられ反復されるのは、噂が期待を表明し、信念を正当化し、恐怖や憎悪を掻き立て、表象を培い、態度を正当化するからであり、あるいはまた、噂が説明し動員するからでもある」（Ploux, 2003, p. 50）。このような独自の機能を持つ噂に取って代わる情報を発信することは、公権力にとってほとんど不可能とも言える難事であろう。

シブタニは、「流言を抑圧することも、実際には一種のプロパガンダである。それは、望み通りのパースペクティブを形成させるように、コミュニケーション内容を操作することだからである」(シブタニ、1985年、280-281頁)と言う。このプロパガンダは、制度的チャネル¹⁶(王政復古初期ならば、内務大臣→県知事→市町村長という行政システム、司教→司祭という宗教システム、新聞)を通じて行われるが、往々にして成果をあげることができない。シブタニは適切にも次のように指摘する。「権力者による統制が強制的に課される場合でさえ、自発的で補助的なチャネルはしばしば制度的情報源を不用にしてしまう。流言は往々にして人を困惑させ、ときには非常に危険なものとなるが、そうした流言がひろがるということは、人々が独立して判断を下すことの、また公的に承認されている定義を受動的に受け入れたりするのを好まないことのひとつのあらわれなのである」(シブタニ、1985、296頁)。そうである以上、公権力による噂の統制には大きな困難が伴うことを十分に認識しなければならない。ファーマの力は、公権力にとって手に余るものなのである。

おわりに

フランスにおける19世紀は、情報の流通の領域において、重要な発展を見た時代であった。新聞などの定期刊行物の発刊は飛躍的に増加し、鉄道や電信の敷設は情報の伝達速度を格段に引き上げた。この時代、情報伝達は、定期性という面でも、迅速性という面でも、大きな進展を遂げたのであった。しかし、「情報のアンシアン・レジーム」(Ploux, 2003, p.57)とでも呼べるような状態のいくつかの特徴は、なおも持続していた。新聞へアクセスする社会層は、アンシアン・レジーム末期以来、民衆諸階層にも広がり始めたとはいえ、民衆諸階層のなお低い識字率

のゆえに、文字に書かれた情報は、口頭を経由しなければ広まらなかった。そしてまた、定期刊行物の飛躍的發展にせよ、公権力によるコミュニケーション・インフラの近代化の促進にせよ、情報伝達における伝統的な媒介者ないし媒体(行商人、旅行者、浮浪者、出稼ぎ労働者、駅馬車の御者、書簡)を消滅させることはなかった。19世紀のフランスにあっては、これらの伝統的な媒介者ないし媒体や私的な知り合い間の口頭によるコミュニケーションが、噂の伝達される非公式のコミュニケーション・ネットワーク、つまりシブタニの言う「補助的チャネル(「うわさ情報路」)」の形成に主として与ったのであった。

つまり、19世紀においても、噂の伝達様式は近世以来おそらくほとんど変化していない。しかし、噂の内容はこの時代に刷新されたとブルーは言う。すでに述べたように、19世紀には、民衆的諸階層の想像界は、かつてないほど政治的諸党派の宣伝熱に働きかけられた。民衆は、全国政治の舞台で競合する様々な勢力を相争わせる議論や争点に絶えずより一層巻き込まれていった。こうした動きの中で、民衆の政治的情報に対する欲求は増大し、「噂の主題系(thématique)の政治化という現象」が生じたとブルーは見る。民衆の想像界への新たな政治的主題系の浸透が露わにしているのは、「1848年3月までは有権者から排除されていた人々における、政治的諸問題へのこれまでよりも鋭敏な感性」なのだと彼は主張する(Ploux, 2003, pp. 231-232)。ブルーの言う「政治化」においては、「ナショナルな政治」のみが含意されており、「ローカルな政治」は考慮されていないので、「政治化」という表現が適切かどうかは留保したい。加えて、彼の用いた資料が、政治の領域に属する噂を過剰代表する傾向を持っていたことも、「噂の主題系の政治化」という見解への留保を促す。だが、19世紀においては、多くの噂が長距離にわたって伝播し、いくつかは国土の全域に広がったのは確かである。「噂の流布は、農村部への新たな関心事の浸透を促進しただけではなく、同じ神話、同じ恐怖、同じ怨恨の作用を受けることで、農民たちの知的視野の拡大をも促した。口頭によるコミュニケーションや噂は、村落集団や街区を広い政治空間へ統合するプロセスに大いに寄与したのだ」というブルーの

¹⁶ 「制度的チャネル」とは、シブタニの言う意味で用いている。それは「安定した規則、はつきり規定された役割を達成する職員、職員をどのように交替しても遺漏のないほど確立されている手続き、および維持運営のための制裁措置などの存在」を特徴とする、高度に組織化されたコミュニケーション・チャネルのことである(シブタニ、1985、39頁)。これを補完するのが、「補助的チャネル、つまり「うわさ情報路」(grapevine)」という非公式のコミュニケーション・ネットワークである(シブタニ、1985、40頁)。

主張 (Ploux, 2003, p. 233) は、現段階でも諒としてよい。

だが、同時に彼がこうも述べているのには同意できない面がある。「誤った情報の流れの〔19 世紀における〕異例の密度は、なおきわめてアルカイックな政治文化を物語るものでもあった。フランス人の大多数は、時事問題の展開については不完全な知識しか持っておらず、現実の政治的争点を漠然としか認識していなかった。加えて、噂への集会的な参入は、見解の交換に基づく、政治的問題への批判的な関係よりも、偏見の専制や見識の欠如を思わせる」(Ploux, 2003, p. 232)。

噂として表現される政治文化に「偏見の専制や見識の欠如」を見るこのような捉え方は、オルポート=ポストマン流の啓蒙的な姿勢に通じる。本稿で見たように、噂のダイナミズムは、体制側と反体制側の双方の政治的エリートが統御しきれるようなものではなかった。筆者はここに啓蒙の敗北の物語を読み取るつもりはない。19 世紀の人々の政治的想像界により寄り添った理解に努める必要がある。そうした理解に資するべく噂のテーマ分析に歩を進めたい。

参考文献

- (本文では、邦訳のある文献は、邦訳の方を提示した。なお、邦訳文献からの引用については、原文と対照のうえ、訳語・訳文に一部変更を加えたものがあることをお断りしておく。)
- オルポート、GW.; ポストマン、L. (南博訳)『デマの心理学』岩波書店、1952; 復刻版、岩波書店、2008 (Gordon W.Allport and Leo J.Postman, *The Psychology of Rumor*, Henry Holt, New York, 1947) .
- Baczko, Bronislaw, *Comment sortir de la Terreur. Thermidor et la Révolution*, Gallimard, Paris, 1989.
- Bercé, Yves-Marie, *Histoire des croquants. Étude des soulèvements populaires en France au XVIII^e siècle dans le sud-ouest de la France*, Droz-Mouton, Paris-Genèves, 1973.
- Bercé, Yves-Marie, *Croquants et Nu-pieds. Les soulèvements paysans en France du XVI^e au XIX^e siècle*, Gallimard/Julliard (Collection Archives), Paris, 1974.
- Bloch, Marc, *Réflexions d'un historien sur les fausses nouvelles de la guerre*, Editions Allia, Paris, 2007 (Première publication en 1921 dans la *Revue de synthèse historique*).
- Caron, Jean-Claude, *L'été rouge. Chronique de la révolte populaire en France (1841)*, Aubier, Paris, 2002.
- コルバン、アラン (石井洋二郎・石井啓子訳)『人喰いの村』藤原書店、1997 (Alain Corbin, *Le village des cannibals*, Aubier, Paris, 1990) .
- De Bertier de Sauvigny, G, *La Restauration*, Flammarion, Paris, 1955.
- ドリュモー、ジャン (永見文雄・西澤文昭訳)『恐怖心の歴史』新評論、1997 年 (Jean Delumeau, *La Peur en Occident (XIV^e -XVIII^e siècles)*. *Une cité assiégée*, Fayard, Paris, 1978) .
- ディフォンツォ、ニコラス (江口泰子訳)『うわさとデマ——ロコミの科学』講談社、2011 (Nicholas DiFonzo, *The Watercooler Effect. A Psychologist Explores the Extraordinary Power of Rumors*, Avery, New York, 2008) .
- Farge, Arlette, *Dire et mal dire. L'opinion publique au XVIII^e siècle*, Éditions du Seuil, Paris, 1992.
- Farge, Arlette, « rumeur » in Michel Delon (dir.), *Dictionnaire européen des Lumières*, PUF, Paris, 1997.
- ファルジュ、アルレット; ルヴェル、ジャック (三好信子訳)『パリ 1750——子供集団誘拐事件の謎』新曜社、1996 年 (Arlette Farge, Jacques Revel, *Logiques de la foule. L'affaire des enlèvements d'enfants, Paris 1750*, Hachette, Paris, 1988) .
- 藤竹暁『パニック——流言蜚語と社会不安』日本経済新聞社、1974.
- 早川洋行『流言の社会学——形式社会学からの接近』青弓社、2002.
- 広井脩『うわさと誤報の社会心理』日本放送出版協会 (NHK ブックス)、1988.
- 広井脩『流言とデマの社会学』文藝春秋 (文春新書)、2001.

- カプフェレ、ジャン＝ノエル（古田幸男訳）『うわさ——もっとも古いメディア [増補版]』法政大学出版局、1993（Jean-Noël Kapferer, *Rumeurs*, Edition du Seuil, Paris, 1987）。
- Kaplan, Steven L., *The Famine Plot Persuasion in Eighteenth-Century France*, The American Philosophical Society, Philadelphia, 1982.
- 甲山三詠「心性の歴史からイマジネールの歴史へ——ジャック・ルゴフの問題意識の特徴」『欧米文化研究』第17号、1999.
- 甲山三詠「アナール学派第三世代における問題意識の転換——ジャック・ルゴフによるイマジネール概念の提唱」『社会文化史学』第43号、2002.
- Lefebvre, Georges, *La Grande Peur de 1789*, Paris, 1932; suivi de “Les Foules révolutionnaires”, Almand Colin, Paris, 1988.
- McPhee, Peter, *The Politics of Rural Life. Political Mobilization in the French Countryside 1846—1852*, Clarendon Press, Oxford, 1992.
- Ménager, Bernard, *Les Napoléon du peuple*, Aubier, Paris, 1988.
- 南博「流言蜚語にあらわれた民衆の抵抗意識」『文学』30巻4号、1962（南博『社会心理学の性格と課題』勁草書房、1964に再録）。
- モラン、エドガール（杉山光信訳）『オルレアンとうわさ——女性誘拐のうわさとその神話作用』みすず書房、第2版、1980（Edgard Morin, *La Rumeur d'Orléans*, Éd. du Seuil, Paris, 1969; nouvelle éd., 1970）。
- ノイバウアー、ハンス＝ヨアヒム（西村正身訳）『噂の研究』青土社、2000（Hans-Joachim Neubauer, *FAMA —Eine Geschichte des Gerüchts*, Berlin Verlag, Berlin, 1998）。
- Ploux, François, Politique, rumeurs et solidarités territoriales dans les résistances au recensement de 1841, *Cahiers d'histoire*, t.44, 1999.
- Ploux, François, L'imaginaire social et politique de la rumeur dans la France du XIX^e siècle (1815—1870), *Revue historique*, t.614, 2000.
- Ploux, François, *De bouche à oreille. Naissance et propagation des rumeurs dans la France du XIX^e siècle*, Aubier, Paris, 2003.
- Ponteil, Felix, Le ministre des Finances Georges Humann et les émeutes antifiscales en 1841, *Revue historique*, t.179, 1937.
- ロスノウ、R.L.; ファイン GA.（南博訳）『うわさの心理学——流言からゴシップまで』岩波書店、1982（Ralph L. Rosnow and Gary Alan Fine, *Rumor and Gossip. The Social Psychology of Hearsay*, Elsevier Scientific Publishing Company, New York, 1976）。
- 佐藤健二『流言蜚語——うわさ話を読みとく作法』有信堂、1995.
- シブタニ、タモツ（広井脩・橋元良明・後藤将之訳）『流言と社会』東京創元社、1985（Tamotsu Shibutani, *Imvised News. A Sociological Study of Rumor*, Bobbs-Merrill, Indianapolis, 1966）。
- 清水幾太郎『流言蜚語』日本評論社、1937；筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2011.
- ソブール、アルベール（飯沼二郎・坂本慶一訳）『資本主義と農村共同体』未来社、1956（Albert Soboul, *La communauté rurale à la fin du XVIII^e siècle, Le mois d'ethnographie française*, No.3, 1950; Id., *La question paysanne en 1848, La Pensée*, N^{os} 18, 19, 20, 1948）。
- Weber, Eugen, *Peasants into Frenchmen. The Modernization of Rural France, 1870—1914*, Stanford University Press, Stanford, 1976.